【書評】斧原孝守著『猿蟹合戦の源流、桃太郎の真実』三弥井書店刊

B6判二六三ページ　定価二、八〇〇円＋税

酒井董美（ただよし）

著者・斧原孝守氏は1957年大阪市生まれの64歳。兵庫教育大学大学院修士課程修了。専攻は比較説話学、特にアジア諸民族の神話・昔話の比較研究を続けている。

斧原氏は長く奈良県立高等学校教諭を務めた。筆者とはアジア民間説話学会の仲間である。本書のサブタイトルは「東アジアから読み解く五大昔話」とある。

「はじめに」から一部を引用しておく。

…本書は「猿蟹合戦」をはじめ、「桃太郎」・「舌切り雀」・「カチカチ山」・「花咲か爺」という、日本の昔話を代表する五つの話―いわゆる「五大昔話」―の源流を国外に探ろうとしたものである。これら五つの昔話は、いかにも古くから日本に伝わっていた日本独特の話のようにみえるが、文献で確認できるのはせいぜい江戸時代半ばまでにすぎない。その特徴的なストーリーの由来については、ほとんど分かっていないのである。この問題を周辺諸国の昔話との比較によって解明してみたい、というのが本書の目的である。…

目次を紹介すると、「はじめに」と「凡例」、「おわりに」、「索引」の他に、次の10章に分かれている。1・猿と蟹はなぜ争うのか？、2・「猿蟹合戦」は、どこで生まれたのか？、3・「桃太郎」はなぜキビ団子を持ってゆくのか？、4・日本の「桃太郎」とは、いったい何者か？、5・「舌切り雀」はどこから来たのか？、6・爺はなぜ「舌切り雀」を追いかけるのか？、7・「カチカチ山」の爺は、なぜ、「婆汁」を食べさせられるのか？、8・「カチカチ山」の狸は、なぜ何度も兎にだまされるのか？、9・「花咲か爺」は日本生まれの昔話か？、10・「花咲か爺」の犬はどこから来たのか？

こうして目次の項目を眺めるだけでも、読者としては、これまで自明のこととして疑問すら湧かなかった問題に、なんと答えるべきだろうか、と一気に興味がそそられるのではなかろうか。

著者は、これらの疑問に対して、特に中国大陸辺境部に住む34の少数民族が伝える昔話を例に挙げながら比較検討し、それらの昔話間の関連を明らかにして、伝承の流れを特定してくれているのである。言われてみればなるほどと、納得するから不思議である。

こうして著者の該博な知識から、それぞれの疑問に対する回答が導き出されてくる。

民話に関心を持つ者にとっての必読書として、筆者は心から推薦したい。**（元島根大学法文学部教授）**